

2024年5月2日

## 2024年3月 Nr. 516

今回は「一人で生きる」(Alleine leben) ことが話題になっています。

多くの人々は、一人暮らしをしていることは全く悪くはないと思っていますし、実際、かなり良いとさえ感じています。このテーマについて、ビーレンベルクさん (Frau Bielenberg) は、ヴァイヒャートさん、(Herr Weichert) とライヒェンバッハさん (Frau Reichenbach) と話し合いました。彼らはどちらも子供を望んでいませんでしたが、別のパートナーを常に探すこともありませんでした。彼女は実際にはフランス人男性と12年間結婚していました。彼らが別れたときは、彼女はほっとしました。彼は以前、2年間パートナーと一緒に暮らしていましたが、少し飽きてしまったようですし、彼女もひよっとしたらそうだったかもしれません。彼女は、どこかに落ち着きたかったと表現しています。

彼は長期的には一人で暮らすことが最善だと考えています。彼の親しい友人は離婚を経験しました。彼は家族が崩壊する様子を目の当たりにしました。多くの口論、悪口、絶望がありました。彼は、一人で暮らすことは良くないかもしれない、しかしながら自分にとっては、常に理想的ではないとしても、ひよっとしたらやはり最善の選択であるかもしれないと自分に言い聞かせました。ただし、同僚や友人の間では話さないことを、話せるような誰かを近くに持っていたいとちょっと感じる事が再三あります。

彼にとって、一人暮らしの良いところは、やるやらないを自分の意志でできることにあります。自分自身のために、すべてを一人で決定できます。それは彼にとって自由の一部です。友人の結婚生活を見て、この自由がどれだけ早く失われ、大きな愛が日常生活のために犠牲にされることを目撃しました。これを目の当たりにしたことは、彼にとって印象的だと思いました。

彼は今では47歳です。もっと若いころは、彼は長期的なパートナーシップにおいて生活することを想像できましたが、ただ子供を持つことだけは望んでいませんでした。彼はおそらく子供に対する責任が生まれることを恐れていたのでしょう。彼が育ったのはカールスルーエの近郊でした。彼は高校卒業資格を取得せず、中等教育まで学校に通いました。職業訓練を受けてからようやく、彼は専門単科大学の資格を取得し、二次的教育システムで学業を続けました。彼は多くのことを成し遂げましたが、家庭を築くことには自信がありませんでした。しかしながら、それゆえに彼は何も欠けていると感じていませんでした。

ライヒェンバッハさん (Frau Reichenbach) は66歳です。彼女は外国語通信員でした

が、現在は北海にあるフーズム (Husum) の築 90 年の家の小さな住居で年金生活を送っています。彼女は金銭面で決して男性に依存するのではなく、自分でお金を稼いだからです。彼女は世界を知り、人生を楽しむことを望んでおり、それを実現もしました。もちろん、それには恋愛関係も含まれていました。しかしながら、彼女は常に自分の興味を後回しにしていました。

彼女は例えば、いつも自転車に乗るのが好きでした。しかしながら、彼女がちょうどパートナーを持っていたときは、そのパートナーがそれを好まなかった場合、彼が彼女に求めなくとも自転車に乗ることをやめました。恋愛関係が終わったときには、また彼女のパートナーの他の興味に配慮することなく、パートナーが全く望まない場合でも、自分がしたいことを再びすることができることを、いつも満足して喜んでいました。

彼女は自分の人生で子供を持った家庭生活を想像できませんでした。そこで彼女は 26 歳のときに、妊娠できないようにするために避妊手術を受けました。その決断を決して後悔したことはありませんでした。彼女がそのフランス人の男性と知り合ったとき、フランクフルト・アム・マインに住んでいました。彼女が子供を望まないことを彼は受け入れました。そして、彼らはアルザスに引っ越しました。そこで彼らはフランスに住むことになりましたが、彼女はそこから引き続きドイツで働くことができました。彼は飲食業界で働いていました。しかしながら、彼は失業し、多くのアルコールを摂取するようになりました。一方、彼女は働いて 2 人の生計を立てていました。

彼は飲食業界で働いていました。しかしながら、彼は失業し、多くのアルコールを摂取するようになりました。一方、彼女は働いて 2 人の生計を立てていました。しかし、この状況はうまく行きませんでした。

今や彼女は一人で幸せであり、満足しています。彼女は一人で暮らしていますが、寂しいとは感じていません。彼女には多くの女性の友人がいますが、フーズムに住んでからは彼女たちとはインターネットを通じて連絡を取り合っています。また、フーズムには彼女にとって好感の持てる隣人もいます。彼女はその女性とはますます頻繁に会って、お茶を飲みます・・・。

さて、多くの「シングル」は、適切なパートナー、最良の場合は一生のパートナーを探しています。しかしながら、本当に大きな永遠の愛は存在するのでしょうか？一部の人はそれを見つけたと考えている一方で、他の人々はもう信じていないか、一人暮らしの生活を悪く思っていない、いや実際にはかなり良いとさえ思っています。今回インタビューに答えてくれたヴァイヒャートさんとライヒェンバッハさんもその中に含まれます・・・。

今回の放送は、上記の導入部のナレーションでスタートし、司会役のビーレンベルクさんがシングルの生活を実践している二人を自宅に訪ね、インタビューした内容で構成されています。シングルと言っても、いわゆる「根っからの独身主義者」というわけではなく、パートナーとの生活を経験した後で、今は一人で生きることを選択しています。

テキスト 35 ページにおいては、ライヒェンバッハさんの発言として、Alleinsein（「一人でいること」）は一種の状態であり、Einsamkeit（「孤独であること」）は感情です、そして彼女はEinsamkeitを知らないということが紹介されていますが、この言葉は私にはとても印象的であり、なるほどと納得した次第です。Alleinseinは客観的な「状態」であり、Einsamkeitは主観的な「感情」であるとも言えます。

ところで、47歳のヴァイハートさんは現在の一人での生活に満足していますが、番組の最後の方で語っている以下の発言からは、パートナーとの生活を完全には否定するまでには至っていないという印象を持ちました。「私は、パートナーに出会うことで人生を豊かにできていると感じています。それは私にとってわくわくすることでもあります。・・・私が明日スーパーマーケットに行くと、豆の棚の周りを歩いていると、そこに私の理想の女性が立っているかもしれません」という発言からもそれがうかがえます。

また、66歳のライヒェンバッハさんはヴァイハートさんとは少し異なり、現在では一人で生活することが最善であると結論を出し、それを実践しているようです。そして自分に必要なのはパートナーではなく、友人であると断言します、番組の最後の方で語っている以下の発言からもそれがうかがえます。「私にとって、友情は、今ではそうであると信じていますが、以前からも、どんなパートナーシップよりも重要で価値があります。すべてのパートナーとの関係は最初の興奮・高揚感の後にはいつも失望が訪れます。彼女の友人たちとは異なり、パートナーは時間とともにますます配慮に欠けるようになります」

それにしてもライヒェンバッハさんは、26歳の時に妊娠できないようにするために避妊手術を受けたことに私は衝撃を受けました。自分の人生で子供を持った家庭生活を想像できなかったためということが理由でしたが、まだ26歳で後戻りできない決断をしたことには驚きます。子供を持ちたくないということであれば他にも複数の避妊の選択肢があると思いますので、避妊手術までするという徹底ぶりには驚きます。女性が避妊のため手術まですることがドイツではどれくらい普及しているか分かりませんが、決して多数派ではないだろうと思うのですが・・・。放送を聞いた時のドイツのリスナーの皆さんの反応はどうだったのでしょうか。私と同様驚いたのか、それとも当然の決断だと思ったのか、興味が沸くところです。

さて、ライヒェンバッハさんは 66 歳、ヴァイヒャートさんは 47 歳と大分年齢も異なるわけですが、一人で暮らすことに納得しながらも彼らの考え方には違いがあるようです。しかしながら、そのような違いがある一方で二人に共通していると思ったのは、子供を持つことは考えられないという点と自分が強く引きつけられる興味・趣味を持っていることにあると思いました。

ところで、テキスト 37 ページに nach dem kleinsten gemeinsamen Nenner suchen (最も小さい共通の分母・基盤を求める) という興味ある表現とその説明として脚注に Bei Brüchen steht unten der Nenner. Zum Addieren bringt man sie auf das kleinste gemeinsame Vielfache als neuen Nenner. (分数においては、分母は下にあります。足し算をするにはそれらを最小公倍数に揃えて新しい分母にします) という説明が記載されていました。Mathematik 用語の Nenner という単語の使われ方だけでなく、分数についての説明に興味を引かれましたし、ドイツ語での説明が新鮮に感じられました。分数計算のやり方については日本語では当然理解していることですが、ドイツ語を勉強している中でも普通は算数・数学用語は出てきませんので、おもしろいと感じました。これを機会に記憶しておきたいと思いました。尚、「分母」だけでなく、「分子」や「最小公倍数」のドイツ語訳についても、私は知りませんでした。「分子」は手元の辞書によりますと、der Zähler と表現するようです。

また、「加減乗除」についても一部私の知らない単語があり、調べたところ以下の通りです。「足し算」は die Addition、「引き算」は die Subtraktion、「かけ算」は die Multiplikation、「割り算」は die Division、さらに「かけ算」の結果の「積」は das Produkt、割り算の結果の「商」は der Quotient、「余り」は der Rest と表現することです。またそれぞれの計算をするときの動詞もありましたが、ここでは割愛します。

K. K.

2024年5月30日

## 2024年4月 Nr. 517

さて、今回は「歩行者に優しい街」が取り上げられています。

ヴァルドルフ (Walldorf) は、バーデン (Baden) 地方におけるかなり小さな街ですが、バーデン・ヴュルテンベルク州にあり、ハイデルベルク市の南方 70 キロに位置します。バーデン・ヴュルテンベルク州はドイツの 13 州の一つですが、ドイツでは更に州の権利を有するベルリン、ハンブルクそしてブレーメンなどの 3 つの都市が加わります。バーデン・ヴュルテンベルク州の州都はシュトゥットガルトであり、2012 年以降、ケルトさん (Herr Koerdt) が交通省で新たに設立された「自転車・歩行者交通局」を率いています。彼と話すために、アイヒラーさん (Frau Eichler) は、シュトゥットガルトやヴァルドルフには行きませんでした。彼に歩行者交通の成果について尋ねるため、アイヒラーさんはインターネットを通じて彼にインタビューしました。

歩行者のための大きな成功の一つは、地方自治体が横断歩道を設置しやすくなったことにあります。州政府の指令により、地方自治体は既存の規定をできる限り寛大に解釈するよう奨励されています。さらに、歩行者のために何かをするために、交通法改革の提案を作成する必要があります。これにより、地方自治体は自主的に決定できるようになります。

時速 30 キロの速度で運転している人が、道路を横断する子供を見かけた場合、時速 50 キロの速度で運転している場合よりも、半分の時間で車を停止することができます。そのため、多くの自治体は、町を通る連邦道路でも歩行者の安全性を高めるために最高速度を 30 キロに制限したいと考えています。しかしながら、通常は地方自治体がこれを行うことは許可されていません。

都市内を自転車で移動するための条件を改善するために、既に多くの取り組みがなされています。これは一般的には歩行者の負担ではなく、自動車の運転者の負担となりました。自転車道を設置するか、または既存のものを拡充・改善する場所では、自転車に乗る人もはや歩道を走らなくて済むようになり、それによって歩行者の安全の向上に資するものになっています。

ケルトさんにとって、歩道を走る自転車乗りは大きな問題の一つです。なぜなら、そこで繰り返し事故が発生しているからです。しかしながら、歩行者のために直接的に多くのことを行うことにより、また自転車乗りのために間接的に多くのことを行うことによって、

もっと多くの人々が歩行を選ぶようになるかはまだわかりません。なぜならば、それにはまだ行われている取り組みが少なすぎるからです。ケルトさんは、2030年までにこの州の住民が20%ではなく30%の移動を歩行で行うことを目指しています。この目標を達成するため、彼は地方自治体と協力して、例えば街の中心部での交通を制限・抑制するなどの対策を講じることにより、歩行者にやさしいインフラを整備しています。

ヴァルドルフのある住民は、ヴァルドルフの住民たちは、ここが小さな街であるため、どこへでも歩いて簡単に行けるといっていています。この街には歩行者専用区域、中央広場、複数の教会などが備わった美しい旧市街があるといいいます。しかしながら、一部の狭い道路では歩道が狭く、一部の場所では家に入るために通る階段があるため、歩行者にとっては、更に狭く感じることもあるとのこと。特に、歩行補助車で外出している高齢者やベビーカーを押している家族は、時々道路を避ける必要があることを意味しています。

旧市街地の近くには多くの店舗、診療所、学校があります。しかしながら、多くの小さな地方自治体では、交通について問題になったとき、常に最初に自動車のドライバーのことを思い浮かべてしまいました。そして彼らの多くは、自分たちが時折どれほど無神経に行動してきたかについて気づいていませんでした。再三再四、歩道駐車者、つまり自分の車を歩道に止めているドライバーに出くわすといっています。するとそこでは歩行者のためのスペースがもはや全く無くなってしまふほどです。このようなことが度々起きたので、ヴァルドルフ市の議会は歩道駐車者が罰金を払わなければならないことを議決しました。

更に新たに二つの横断歩道を設置されました。一つは生徒のために学校の近くに、もう一つは労働者のために通勤路に、です。現在歩行者は実際に、それによりちょっと変わったこと、また、それが自分の街でより快適に感じることに役立っているという気がしているといっています・・・。

さて、今回「歩行者に優しい街」として、ヴァルドルフというバーデン・ヴュルテンベルク州の小さな街が紹介されています。この街は人口約16,000人であり、どこにでも徒歩移動が可能であるとのことですが、今までは他の多くの地方自治体と同様、車優先社会でした。しかしながら、歩道への駐車に対する罰金や新たに横断歩道の設置などの対策を行っていますので、徒歩移動には優しい街に変貌しつつあるようです。現時点での徒歩での移動比率や今後の目標についても知りたいところです。小さな街ですので、市民が一丸となって取り組むことにより徒歩での移動比率は大きくアップさせられるような気がします。

ところで、テキスト11ページ～12ページに歩行に関して二つ興味深い記載がありました。

それは2017年の「ドイツにおける移動（手段）」（„Mobilität in Deutschland“）という調査結果です。これによると、一つは大都市に住む人は平均して一日の四分の一（25%）～三分の一（33%）の距離を徒歩で移動していること、二つ目は、14歳以上の大多数のドイツ人はもっと徒歩移動を増やしたいと考えており、歩くことは他のどの移動手段より突出して最も好まれる移動手段であることが明らかになったことです。まずは一番目の点、25%～33%の距離を徒歩で移動しているということですが、これが多いのか、少ないのか私には評価が難しいところです。自分自身のことを振り返ってみますと、普段の移動手段は自転車ですが、それでも街中の駐輪場に自転車を止め、そこを起点に買い物などですべて徒歩で移動しますし、その他にもウォーキングや散歩で徒歩での移動があることを考えれば、上記の調査結果に比べ、私自身のほうが徒歩での移動の比率は高いかもしれません。また、二つ目の記載も興味深いですが、どのような理由が考えられるでしょうか。（私の偏見・思い込みかもしれませんが）ドイツでは元々歩くことを好む人々が多いことに加え、歩くことは健康によいとされていますので、健康志向からという理由もありそうです。また環境保護意識の高い人々が多いことから、環境に配慮した、環境に優しい生活を送りたいからという理由もあるかもしれません。いずれの理由があるにしても、ドイツ人の多くの皆さんがもっと徒歩移動を増やしたいと考え、徒歩が最も好まれる移動手段であると考えているのは納得できる調査結果だと思いました。もし7年後の現在、同じような調査を行えば、更にその比率は高くなっているかもしれません。

上記調査結果では、大都市の住民の徒歩移動の比率が25～33%とのことでしたが、バーデン・ヴュルテンベルク州では現在の20%を2030年までに30%に引き上げたいとケルトさんは目標に掲げています。調査年が同一ではないため、単純比較はできないのですが、それでも現在の同州の徒歩移動はドイツ全体の平均より少なめとは言えるかもしれません。現在着々と対策を実施しているようですので、この目標が達成されることを期待したいと思います。

ケルトさんにとって、歩道を走る自転車乗りは大きな問題の一つとのことですが、実は日本でも、そして私の住んでいる東京においても同じ問題を抱えています。原因は街中には自転車専用道路が殆どないことです。車道の左隅には自転車が通行できるようにマークが施されていますが、車道を走ることに不安を感じるため、そこを利用せずに歩道を通行する人も多いようです。普段自転車を利用している私もその一人です。これは法律的には許されていますが、歩行者を優先した上で、歩行者に対して細心の注意を払わなければなりませんし、歩行者も自転車との接触・衝突事故の不安を感じています。改めて警視庁のホームページを閲覧したところ、以下の記載がありましたので引用します。やはり、自転車の歩道走行は例外ということのようです。

「自転車は、車道の左側通行が原則であり、歩道は例外的に通行することができます。歩道を通行できるのは、

- 道路標識等で指定された場合
- 運転者が13歳未満や70歳以上の高齢者や身体の不自由な人の場合
- 車道又は交通の状況から見てやむをえない場合

等です」

ところで、der Rollator という語彙については、私は知りませんでした。辞書にあたってみましたところ、普段使用している手元の独和辞典電子版（独和大辞典、アクセス独和辞典、クラウン独和辞典）にはいずれにも記載がありませんでした。一方、私の知る限りでは、2022年3月に改訂版が発行されたアポロン独和辞典（第4版）には記載があります。超高齢化社会の現代においては高齢者が日常的に利用する重要な「道具」であり、現在の日本社会でも広く普及していることを考えれば、これは独和辞典にも掲載必須の語彙だろうと思います。同辞典における「(歩行補助の)手押し車」という訳語の適否はともかく（私は荷物を運ぶために使う車輪付きの台車を連想してしまいますので、やや説明的になります）が「歩行補助車」や「シルバーカー」あたりが妥当かもしれません）、他の辞書に先駆けて掲載しているのは良かったと思いますが……。他の紙の辞書においては現在どうなっているかまでは確認しておりませんが、もしまだ未掲載でしたら、今後の改訂版発行の際には是非記載して欲しいと感じました。因みに、上記の電子版辞書に同時に搭載されている独々辞典の Duden Deutsches Universalwörterbuch (6. Auflage) には Rollator は掲載されています。尚、Wikipedia によれば、Rollator は 1978 年にスウェーデンのメーカーが rollator という歩行補助車を発売し、その後ジャンルとして定着し、製品の名称が普通名称化したとのこと。従って、辞書に掲載されている他の多くの語彙に比べれば比較的新しい言葉なのは間違いはありませんが、約半世紀前に発売され、その後この語が定着していったことを考えれば、辞書には掲載されているべきではないでしょうか。

K. K.

2024年5月2日

## 2024年3月 Nr. 516

今回は「一人で生きる」(Alleine leben) ことが話題になっています。

多くの人々は、一人暮らしをしていることは全く悪くはないと思っていますし、実際、かなり良いとさえ感じています。このテーマについて、ビーレンベルクさん (Frau Bielenberg) は、ヴァイヒャートさん、(Herr Weichert) とライヒェンバッハさん (Frau Reichenbach) と話し合いました。彼らはどちらも子供を望んでいませんでしたが、別のパートナーを常に探すこともありませんでした。彼女は実際にはフランス人男性と12年間結婚していました。彼らが別れたときは、彼女はほっとしました。彼は以前、2年間パートナーと一緒に暮らしていましたが、少し飽きてしまったようですし、彼女もひよっとしたらそうだったかもしれません。彼女は、どこかに落ち着きたかったと表現しています。

彼は長期的には一人で暮らすことが最善だと考えています。彼の親しい友人は離婚を経験しました。彼は家族が崩壊する様子を目の当たりにしました。多くの口論、悪口、絶望がありました。彼は、一人で暮らすことは良くないかもしれない、しかしながら自分にとっては、常に理想的ではないとしても、ひよっとしたらやはり最善の選択であるかもしれないと自分に言い聞かせました。ただし、同僚や友人の間では話さないことを、話せるような誰かを近くに持っていたいとちょっと感じる事が再三あります。

彼にとって、一人暮らしの良いところは、やるやらないを自分の意志でできることにあります。自分自身のために、すべてを一人で決定できます。それは彼にとって自由の一部です。友人の結婚生活を見て、この自由がどれだけ早く失われ、大きな愛が日常生活のために犠牲にされることを目撃しました。これを目の当たりにしたことは、彼にとって印象的だと思いました。

彼は今では47歳です。もっと若いころは、彼は長期的なパートナーシップにおいて生活することを想像できましたが、ただ子供を持つことだけは望んでいませんでした。彼はおそらく子供に対する責任が生まれることを恐れていたのでしょう。彼が育ったのはカールスルーエの近郊でした。彼は高校卒業資格を取得せず、中等教育まで学校に通いました。職業訓練を受けてからようやく、彼は専門単科大学の資格を取得し、二次的教育システムで学業を続けました。彼は多くのことを成し遂げましたが、家庭を築くことには自信がありませんでした。しかしながら、それゆえに彼は何も欠けていると感じていませんでした。

ライヒェンバッハさん (Frau Reichenbach) は66歳です。彼女は外国語通信員でした

が、現在は北海にあるフーズム (Husum) の築 90 年の家の小さな住居で年金生活を送っています。彼女は金銭面で決して男性に依存するのではなく、自分でお金を稼いだからです。彼女は世界を知り、人生を楽しむことを望んでおり、それを実現もしました。もちろん、それには恋愛関係も含まれていました。しかしながら、彼女は常に自分の興味を後回しにしていました。

彼女は例えば、いつも自転車に乗るのが好きでした。しかしながら、彼女がちょうどパートナーを持っていたときは、そのパートナーがそれを好まなかった場合、彼が彼女に求めなくとも自転車に乗ることをやめました。恋愛関係が終わったときには、また彼女のパートナーの他の興味に配慮することなく、パートナーが全く望まない場合でも、自分がしたいことを再びすることができることを、いつも満足して喜んでいました。

彼女は自分の人生で子供を持った家庭生活を想像できませんでした。そこで彼女は 26 歳のときに、妊娠できないようにするために避妊手術を受けました。その決断を決して後悔したことはありませんでした。彼女がそのフランス人の男性と知り合ったとき、フランクフルト・アム・マインに住んでいました。彼女が子供を望まないことを彼は受け入れました。そして、彼らはアルザスに引っ越しました。そこで彼らはフランスに住むことになりましたが、彼女はそこから引き続きドイツで働くことができました。彼は飲食業界で働いていました。しかしながら、彼は失業し、多くのアルコールを摂取するようになりました。一方、彼女は働いて 2 人の生計を立てていました。

彼は飲食業界で働いていました。しかしながら、彼は失業し、多くのアルコールを摂取するようになりました。一方、彼女は働いて 2 人の生計を立てていました。しかし、この状況はうまく行きませんでした。

今や彼女は一人で幸せであり、満足しています。彼女は一人で暮らしていますが、寂しいとは感じていません。彼女には多くの女性の友人がいますが、フーズムに住んでからは彼女たちとはインターネットを通じて連絡を取り合っています。また、フーズムには彼女にとって好感の持てる隣人もいます。彼女はその女性とはますます頻繁に会って、お茶を飲みます・・・。

さて、多くの「シングル」は、適切なパートナー、最良の場合は一生のパートナーを探しています。しかしながら、本当に大きな永遠の愛は存在するのでしょうか？一部の人はそれを見つけたと考えている一方で、他の人々はもう信じていないか、一人暮らしの生活を悪く思っていない、いや実際にはかなり良いとさえ思っています。今回インタビューに答えてくれたヴァイヒャートさんとライヒェンバッハさんもその中に含まれます・・・。

今回の放送は、上記の導入部のナレーションでスタートし、司会役のビーレンベルクさんがシングルの生活を実践している二人を自宅に訪ね、インタビューした内容で構成されています。シングルと言っても、いわゆる「根っからの独身主義者」というわけではなく、パートナーとの生活を経験した後で、今は一人で生きることを選択しています。

テキスト 35 ページにおいては、ライヒェンバッハさんの発言として、Alleinsein（「一人でいること」）は一種の状態であり、Einsamkeit（「孤独であること」）は感情です、そして彼女はEinsamkeitを知らないということが紹介されていますが、この言葉は私にはとても印象的であり、なるほどと納得した次第です。Alleinseinは客観的な「状態」であり、Einsamkeitは主観的な「感情」であるとも言えます。

ところで、47歳のヴァイヒャートさんは現在の一人での生活に満足していますが、番組の最後の方で語っている以下の発言からは、パートナーとの生活を完全には否定するまでには至っていないという印象を持ちました。「私は、パートナーに出会うことで人生を豊かにできていると感じています。それは私にとってわくわくすることでもあります。・・・私が明日スーパーマーケットに行くと、豆の棚の周りを歩いていると、そこに私の理想の女性が立っているかもしれません」という発言からもそれがうかがえます。

また、66歳のライヒェンバッハさんはヴァイヒャートさんとは少し異なり、現在では一人で生活することが最善であると結論を出し、それを実践しているようです。そして自分に必要なのはパートナーではなく、友人であると断言します、番組の最後の方で語っている以下の発言からもそれがうかがえます。「私にとって、友情は、今ではそうであると信じていますが、以前からも、どんなパートナーシップよりも重要で価値があります。すべてのパートナーとの関係は最初の興奮・高揚感の後にはいつも失望が訪れます。彼女の友人たちとは異なり、パートナーは時間とともにますます配慮に欠けるようになります」

それにしてもライヒェンバッハさんは、26歳の時に妊娠できないようにするために避妊手術を受けたことに私は衝撃を受けました。自分の人生で子供を持った家庭生活を想像できなかったためということが理由でしたが、まだ26歳で後戻りできない決断をしたことには驚きます。子供を持ちたくないということであれば他にも複数の避妊の選択肢があると思いますので、避妊手術までするという徹底ぶりには驚きます。女性が避妊のため手術まですることがドイツではどれくらい普及しているか分かりませんが、決して多数派ではないだろうと思うのですが・・・。放送を聞いた時のドイツのリスナーの皆さんの反応はどうだったのでしょうか。私と同様驚いたのか、それとも当然の決断だと思ったのか、興味が沸くところです。

さて、ライヒェンバッハさんは 66 歳、ヴァイヒャートさんは 47 歳と大分年齢も異なるわけですが、一人で暮らすことに納得しながらも彼らの考え方には違いがあるようです。しかしながら、そのような違いがある一方で二人に共通していると思ったのは、子供を持つことは考えられないという点と自分が強く引きつけられる興味・趣味を持っていることにあると思いました。

ところで、テキスト 37 ページに nach dem kleinsten gemeinsamen Nenner suchen (最も小さい共通の分母・基盤を求める) という興味ある表現とその説明として脚注に Bei Brüchen steht unten der Nenner. Zum Addieren bringt man sie auf das kleinste gemeinsame Vielfache als neuen Nenner. (分数においては、分母は下にあります。足し算をするにはそれらを最小公倍数に揃えて新しい分母にします) という説明が記載されていました。Mathematik 用語の Nenner という単語の使われ方だけでなく、分数についての説明に興味を引かれましたし、ドイツ語での説明が新鮮に感じられました。分数計算のやり方については日本語では当然理解していることですが、ドイツ語を勉強している中でも普通は算数・数学用語は出てきませんので、おもしろいと感じました。これを機会に記憶しておきたいと思いました。尚、「分母」だけでなく、「分子」や「最小公倍数」のドイツ語訳についても、私は知りませんでした。「分子」は手元の辞書によりますと、der Zähler と表現するようです。

また、「加減乗除」についても一部私の知らない単語があり、調べたところ以下の通りです。「足し算」は die Addition、「引き算」は die Subtraktion、「かけ算」は die Multiplikation、「割り算」は die Division、さらに「かけ算」の結果の「積」は das Produkt、割り算の結果の「商」は der Quotient、「余り」は der Rest と表現することです。またそれぞれの計算をするときの動詞もありましたが、ここでは割愛します。

K. K.

2024年5月30日

## 2024年4月 Nr. 517

さて、今回は「歩行者に優しい街」が取り上げられています。

ヴァルドルフ (Walldorf) は、バーデン (Baden) 地方におけるかなり小さな街ですが、バーデン・ヴュルテンベルク州にあり、ハイデルベルク市の南方 70 キロに位置します。バーデン・ヴュルテンベルク州はドイツの 13 州の一つですが、ドイツでは更に州の権利を有するベルリン、ハンブルクそしてブレーメンなどの 3 つの都市が加わります。バーデン・ヴュルテンベルク州の州都はシュトゥットガルトであり、2012 年以降、ケルトさん (Herr Koerdt) が交通省で新たに設立された「自転車・歩行者交通局」を率いています。彼と話すために、アイヒラーさん (Frau Eichler) は、シュトゥットガルトやヴァルドルフには行きませんでした。彼に歩行者交通の成果について尋ねるため、アイヒラーさんはインターネットを通じて彼にインタビューしました。

歩行者のための大きな成功の一つは、地方自治体が横断歩道を設置しやすくなったことにあります。州政府の指令により、地方自治体は既存の規定をできる限り寛大に解釈するよう奨励されています。さらに、歩行者のために何かをするために、交通法改革の提案を作成する必要があります。これにより、地方自治体は自主的に決定できるようになります。

時速 30 キロの速度で運転している人が、道路を横断する子供を見かけた場合、時速 50 キロの速度で運転している場合よりも、半分の時間で車を停止することができます。そのため、多くの自治体は、町を通る連邦道路でも歩行者の安全性を高めるために最高速度を 30 キロに制限したいと考えています。しかしながら、通常は地方自治体がこれを行うことは許可されていません。

都市内を自転車で移動するための条件を改善するために、既に多くの取り組みがなされています。これは一般的には歩行者の負担ではなく、自動車の運転者の負担となりました。自転車道を設置するか、または既存のものを拡充・改善する場所では、自転車に乗る人もはや歩道を走らなくて済むようになり、それによって歩行者の安全の向上に資するものになっています。

ケルトさんにとって、歩道を走る自転車乗りは大きな問題の一つです。なぜなら、そこで繰り返し事故が発生しているからです。しかしながら、歩行者のために直接的に多くのことを行うことにより、また自転車乗りのために間接的に多くのことを行うことによって、

もっと多くの人々が歩行を選ぶようになるかはまだわかりません。なぜならば、それにはまだ行われている取り組みが少なすぎるからです。ケルトさんは、2030年までにこの州の住民が20%ではなく30%の移動を歩行で行うことを目指しています。この目標を達成するため、彼は地方自治体と協力して、例えば街の中心部での交通を制限・抑制するなどの対策を講じることにより、歩行者にやさしいインフラを整備しています。

ヴァルドルフのある住民は、ヴァルドルフの住民たちは、ここが小さな街であるため、どこへでも歩いて簡単に行けるといっていています。この街には歩行者専用区域、中央広場、複数の教会などが備わった美しい旧市街があるといいいます。しかしながら、一部の狭い道路では歩道が狭く、一部の場所では家に入るために通る階段があるため、歩行者にとっては、更に狭く感じることもあるとのこと。特に、歩行補助車で外出している高齢者やベビーカーを押している家族は、時々道路を避ける必要があることを意味しています。

旧市街地の近くには多くの店舗、診療所、学校があります。しかしながら、多くの小さな地方自治体では、交通について問題になったとき、常に最初に自動車のドライバーのことを思い浮かべてしまいました。そして彼らの多くは、自分たちが時折どれほど無神経に行動してきたかについて気づいていませんでした。再三再四、歩道駐車者、つまり自分の車を歩道に止めているドライバーに出くわすといっています。するとそこでは歩行者のためのスペースがもはや全く無くなってしまふほどです。このようなことが度々起きたので、ヴァルドルフ市の議会は歩道駐車者が罰金を払わなければならないことを議決しました。

更に新たに二つの横断歩道を設置されました。一つは生徒のために学校の近くに、もう一つは労働者のために通勤路に、です。現在歩行者は実際に、それによりちょっと変わったこと、また、それが自分の街でより快適に感じることに役立っているという気がしているといっています・・・。

さて、今回「歩行者に優しい街」として、ヴァルドルフというバーデン・ヴュルテンベルク州の小さな街が紹介されています。この街は人口約16,000人であり、どこにでも徒歩移動が可能であるとのことですが、今までは他の多くの地方自治体と同様、車優先社会でした。しかしながら、歩道への駐車に対する罰金や新たに横断歩道の設置などの対策を行っていますので、徒歩移動には優しい街に変貌しつつあるようです。現時点での徒歩での移動比率や今後の目標についても知りたいところです。小さな街ですので、市民が一丸となって取り組むことにより徒歩での移動比率は大きくアップさせられるような気がします。

ところで、テキスト11ページ～12ページに歩行に関して二つ興味深い記載がありました。

それは2017年の「ドイツにおける移動（手段）」（„Mobilität in Deutschland“）という調査結果です。これによると、一つは大都市に住む人は平均して一日の四分の一（25%）～三分の一（33%）の距離を徒歩で移動していること、二つ目は、14歳以上の大多数のドイツ人はもっと徒歩移動を増やしたいと考えており、歩くことは他のどの移動手段より突出して最も好まれる移動手段であることが明らかになったことです。まずは一番目の点、25%～33%の距離を徒歩で移動しているということですが、これが多いのか、少ないのか私には評価が難しいところです。自分自身のことを振り返ってみますと、普段の移動手段は自転車ですが、それでも街中の駐輪場に自転車を止め、そこを起点に買い物などですべて徒歩で移動しますし、その他にもウォーキングや散歩で徒歩での移動があることを考えれば、上記の調査結果に比べ、私自身のほうが徒歩での移動の比率は高いかもしれません。また、二つ目の記載も興味深いですが、どのような理由が考えられるでしょうか。（私の偏見・思い込みかもしれませんが）ドイツでは元々歩くことを好む人々が多いことに加え、歩くことは健康によいとされていますので、健康志向からという理由もありそうです。また環境保護意識の高い人々が多いことから、環境に配慮した、環境に優しい生活を送りたいからという理由もあるかもしれません。いずれの理由があるにしても、ドイツ人の多くの皆さんがもっと徒歩移動を増やしたいと考え、徒歩が最も好まれる移動手段であると考えているのは納得できる調査結果だと思いました。もし7年後の現在、同じような調査を行えば、更にその比率は高くなっているかもしれません。

上記調査結果では、大都市の住民の徒歩移動の比率が25～33%とのことでしたが、バーデン・ヴュルテンベルク州では現在の20%を2030年までに30%に引き上げたいとケルトさんは目標に掲げています。調査年が同一ではないため、単純比較はできないのですが、それでも現在の同州の徒歩移動はドイツ全体の平均より少なめとは言えるかもしれません。現在着々と対策を実施しているようですので、この目標が達成されることを期待したいと思います。

ケルトさんにとって、歩道を走る自転車乗りは大きな問題の一つとのことですが、実は日本でも、そして私の住んでいる東京においても同じ問題を抱えています。原因は街中には自転車専用道路が殆どないことです。車道の左隅には自転車が通行できるようにマークが施されていますが、車道を走ることには不安を感じるため、そこを利用せずに歩道を通行する人も多いようです。普段自転車を利用している私もその一人です。これは法律的には許されていますが、歩行者を優先した上で、歩行者に対して細心の注意を払わなければなりませんし、歩行者も自転車との接触・衝突事故の不安を感じています。改めて警視庁のホームページを閲覧したところ、以下の記載がありましたので引用します。やはり、自転車の歩道走行は例外ということのようです。

「自転車は、車道の左側通行が原則であり、歩道は例外的に通行することができます。歩道を通行できるのは、

- 道路標識等で指定された場合
- 運転者が13歳未満や70歳以上の高齢者や身体の不自由な人の場合
- 車道又は交通の状況から見てやむをえない場合

等です」

ところで、der Rollator という語彙については、私は知りませんでした。辞書にあたってみましたところ、普段使用している手元の独和辞典電子版（独和大辞典、アクセス独和辞典、クラウン独和辞典）にはいずれにも記載がありませんでした。一方、私の知る限りでは、2022年3月に改訂版が発行されたアポロン独和辞典（第4版）には記載があります。超高齢化社会の現代においては高齢者が日常的に利用する重要な「道具」であり、現在の日本社会でも広く普及していることを考えれば、これは独和辞典にも掲載必須の語彙だろうと思います。同辞典における「(歩行補助の)手押し車」という訳語の適否はともかく（私は荷物を運ぶために使う車輪付きの台車を連想してしまいますので、やや説明的になります）が「歩行補助車」や「シルバーカー」あたりが妥当かもしれません）、他の辞書に先駆けて掲載しているのは良かったと思いますが……。他の紙の辞書においては現在どうなっているかまでは確認しておりませんが、もしまだ未掲載でしたら、今後の改訂版発行の際には是非記載して欲しいと感じました。因みに、上記の電子版辞書に同時に搭載されている独々辞典の Duden Deutsches Universalwörterbuch (6. Auflage) には Rollator は掲載されています。尚、Wikipedia によれば、Rollator は 1978 年にスウェーデンのメーカーが rollator という歩行補助車を発売し、その後ジャンルとして定着し、製品の名称が普通名称化したとのこと。従って、辞書に掲載されている他の多くの語彙に比べれば比較的新しい言葉なのは間違いはありませんが、約半世紀前に発売され、その後この語が定着していったことを考えれば、辞書には掲載されているべきではないでしょうか。

K. K.

2024年6月28日

## 2024年5月 Nr. 518

さて、今回は「代用肉や菜食」が取り上げられています。

ある文章を番組で2回聞くことは非常に珍しいことです。そのような文章は2023年11月9日の番組で見つかりますが、37ページと41ページにあります。37ページでは、野菜は通常長時間温かく保たれるため、これに関連したその理由にも言及しています。しかしながら、そのようなソーセージは通常、誰かが注文したときに初めて焼かれます。多くのドイツ人は、もはや肉を食べたくないと考えています。それはおそらく彼らの肉を食べるために動物が死ななければならないことを申し訳ないと思うからでしょう。

健康的に食事をするために、肉の代わりに海藻を食べることができるかもしれません。しかしながら、殆どのベジタリアン〔菜食主義者〕はそれを好みません。海藻は彼らにはおいしくはありません。一方で、肉を好んで食べる人々にとっては、味だけでなく、食感も重要です。そのため、いつも肉を最も好んで食べる人々が肉と同じくらい美味しく感じる肉の代替品を開発することが難しかったのです。

ドイツで最も有名な肉製品メーカーの一つは、オルデンブルク (Oldenburg) から西に15キロ離れた田舎町にその本社を構えています。この会社はかつて、ヴェーザー・エムス地域 (Weser-Ems-Region) に25の支店を有する中小企業の精肉店でした。2010年までは400種類の肉製品を製造していましたが、その後、徐々に支店を売却し、特にベジタリアン〔菜食主義者〕向けの製品であるベジタリアンテーヴルストを提供することで大成功を収めました。テーヴルストは多くの人々にとって、とりわけ午後一杯の紅茶を飲みながらヴルストブロートにのせて食べるとおいしいことから、そのように呼ばれていました。さらに、他の肉を含まない製品も登場しており、それらは非常に売れているため、従業員数が倍以上に増えているほどです。

世界中で、過去数年間で肉の消費量はほぼ倍増しており、恐らくドイツの農業経営もその一翼を担っているでしょう。しかしながら、中国がアフリカ豚熱のため豚肉の輸入を中止して以来、肉の大きな売り上げ減が生じています。中国は自国内でますます生産を増やしており、今やEU内では肉の供給過剰となっています。特に、多くのドイツ人が避ける動物の部位を購入する顧客としての中国人が無くなっています。その部位とは、特に豚の尾、足、内臓などです。また、ドイツでは年々肉の消費が減っています。2020年の調査では、

10%の人々が肉を食べないと回答しています。これは前年の倍となっています。

1960年代においては、肉は多くの人にとってまだ贅沢品でした。日曜日のローストは特別なものでした。その後、多くのことが変化しました。1970年代以降、毎日少量の肉を食べることが普通になりました。肉とソーセージは、顧客が店舗に来るようにするために、しばしば特別に安く提供されます。スーパーマーケットでは、肉の販売カウンターがますます大きくなっています。そしてそれらのカウンターは通常は店の奥に配置されていますので、そこに行きたい顧客は結果的にその他の商品棚のところを通り抜けることになるのです。

ドイツ人は平均して50年前の3倍の肉を食べています。ドイツ人一人当たりのために、平均すると、豚30頭、牛2頭、七面鳥20頭、鶏200頭が殺されます。これによって生じる二酸化炭素排出量は、交通によって排出される排出量と同様、環境には大きな負荷となっています。気候危機は、現状のままではいけないことを示しています。この肉の消費に関しては、大量畜産を減らし、農村の農業を促進することが第一歩となるでしょう。そして、食品産業ではベジタリアン〔菜食主義者〕向けの製品を増やす必要があるでしょう。

バルツさん (Herr Bartz) は、3世代目の精肉マイスターです。彼の両親は、1958年からルール地方で精肉店を営んでいました。しかしながら、彼自身は精肉店を経営しておらず、従業員食堂の経営権を借りています。そこでは従業員が昼休みに昼食を取ります。彼の店では毎日、メニューにはベジタリアン向けの料理が載っています。ベジタリアンではなく、普段は肉やソーセージも食べるにもかかわらず、多くの人々がベジタリアン向けの料理〕を食べたいと思っているからです……。

さて、今回話題になっている代用肉・代替肉ですが、その普及の背景には、人々の環境保護意識、動物福祉さらには食料供給の持続可能性（いわゆる「タンパク質危機」？）などがあるようです。従って、今後も普及は拡大していくものと思われます。今回の放送に登場する Rügenwalder Mühle 社は、Beiheft によれば、2010年に考案した野菜ベースの商品の売上げが、2020年には初めて従来の肉ベースの商品を上回ったとのことですが、これも市場の動向を反映しているものと思われます。

ある資料によれば、2020年の世界の植物由来の代替肉市場は約110億ドル（約1兆7,000億円超）でしたが、2030年には886億ドル（約14兆円）に拡大するという予想もあるようです。この数字は大きすぎて私には想像ができず実感がわかないのですが、今後拡大基調にあることだけは間違いなさそうです。一方、日本における状況ですが、2019年に約

300 億円でしたが、幾つかのデータがあるものの、2025 年～2030 年の間には約 1,000 億に拡大するとのこと。私自身も、代用肉・代替肉は興味ある食材でもあり、食材の一つとして数年前から既に利用しているところでしたので、関心が高いテーマでした。

また、今回スーパーマーケットにおける肉の売り場が店の奥に位置しているという興味深い指摘がなされています。今回はドイツにおけるスーパーマーケットの話ですが、私も普段利用している地元の 4 つのスーパーマーケットにおける売り場の配置を改めて思い浮かべたところ、確かにこの指摘があたっていることを確認しました。この指摘は新鮮な驚きでもありました。米国で発祥したスーパーマーケットですから、他にも売り場を巡る「法則」のようなものが存在するのだろうと思います。

ところで、課題において「ドイツ人一人当たりのために、豚 30 頭、牛 2 頭、七面鳥 20 頭、鶏 200 頭が殺されます」と指摘されていますが、この数字にはとても驚き、また信じられないほどの量だと思いました。私が調べたところでは、ドイツ人一人当たりの年間の肉の消費量は 2012 年～2018 年においてはほぼ横ばいで推移し、約 60 キロ、その後徐々に減り、直近のデータでは 2022 年に 52 キロでした。一方、日本人の年間の肉の消費量については、直近のデータによれば、2021 年では 34 キロでした。ドイツ人が日本人より食べる肉の量が多いとは思っていましたが、冒頭の肉の量はあまりにも莫大です。因みに豚一頭は 110～120 kg、正味の精肉重量は約 50 kg とのことですので、ドイツ人、日本人共に年間では豚 1 頭分に満たない量の肉を消費していることとなります。従いまして、上記の「豚 30 頭、牛 2 頭、七面鳥 20 頭、鶏 200 頭が殺されます」は一人当たりの年間の肉の消費量ではなく、一人のドイツ人が一生の間に消費する肉の量がより近いと思いますが、そのような理解で良いのでしょうか。

K. K.